

令和7年7月21日～25日



ブリスベン市管外調査報告書



神戸市会ブリスベン市訪問議員団

神戸市会ブリスベン市訪問議員団の海外視察報告書

令和7年10月31日

神戸市会ブリスベン市訪問議員団団長 平井真千子

植中雅子

吉田健吾

上畠寛弘

村上立真

(以上、自由民主党神戸市会議員団・無所属の会)

高橋としえ

住本かずのり

山本のりかず

のまち 圭一

(以上、日本維新の会神戸市会議員団)

神戸市とオーストラリア連邦・ブリスベン市が1985年7月16日に姉妹都市提携を結んでから今年が40周年に当たることを記念して久元市長を団長とする神戸市訪問団がブリスベン市を訪問して姉妹都市提携40周年記念式典に参加する機会に同市を訪問して記念事業に参加するとともに、22日には石川在ブリスベン日本国総領事とシュリナー・ブリスベン市長を表敬訪問して今後の両市間の姉妹都市提携関係の強化に資するための方策等につき意見交換を行った。また、産業協力や環境協力をはじめとする両都市間の新たな協力の可能性について知見を深めて25日に帰国したところ、本訪問団の海外管外調査報告書を以下の通り提出する。

第一部 ブリスベン市訪問議員団の視察報告

1、石川在ブリスベン日本国総領事表敬(22日13:30)

7月22日13時半より在ブリスベン石川日本国総領事を表敬訪問した。石川総領事より、クイーンズランド州およびブリスベン市の現況について包括的なブリーフィングを受け、その後、活発な意見交換を行った。

在ブリスベン日本国総領事館は、現地の政治・経済・文化に関する情報収集および日本との橋渡し機能を担っており、日本企業の進出や学術・文化交流の促進において極めて重要な役割を果たしている。近年では文化行事やスポーツ団体との交流も積極的に支援しており、民間レベルでの草の根交流の拡大が期待される。

ブリスベン都市圏の人口は約278万人に達しており、神戸市と比較しても大都市圏であ

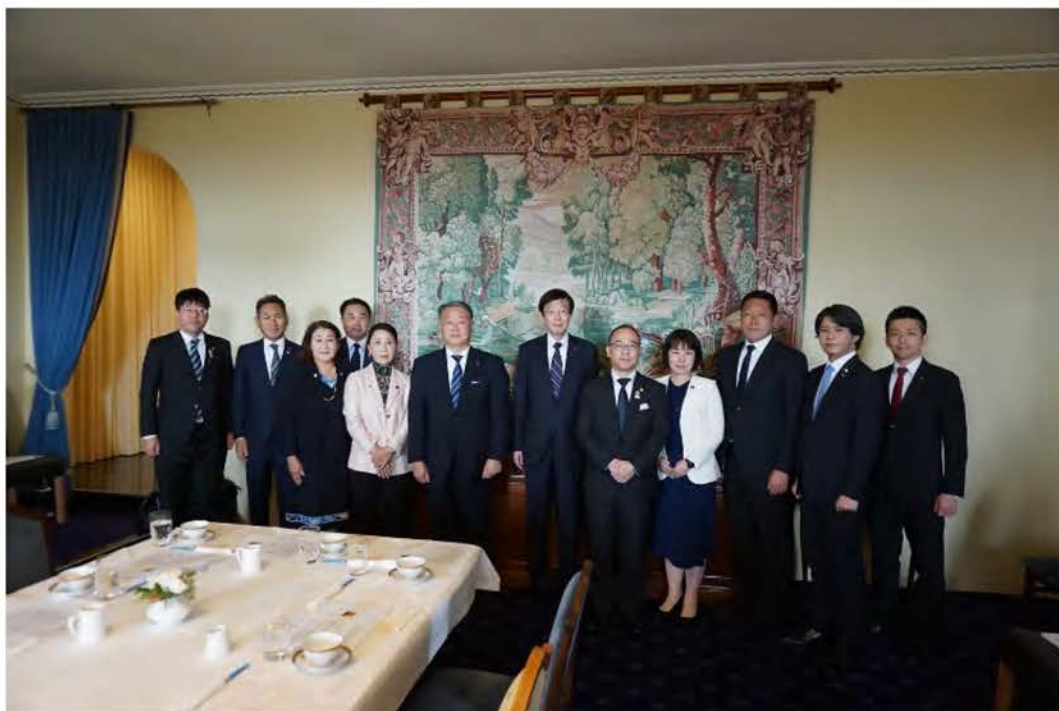
る。特に南東クイーンズランド地域の人口は急速に増加しており、2031年には440万人を超える予測されている。こうした急激な人口増に伴い、都市の持続可能性が大きな課題となっている。都市の規模は異なるが、抱える課題について共通点もあった。現在、当地では物価高騰や住宅不足、医療現場の逼迫、青少年による犯罪の増加といった深刻な社会問題が顕在化しており、これらの対策はブリスベン市政の大きな課題となっており、神戸市を含む日本の地方都市が直面する課題とも重なる。

経済面では、ブリスベン市が所在するクイーンズランド州は石炭（特にコークス用）の輸出を中心に日本との経済的な結びつきが強く、資源供給国としての役割を果たしている。また、アジア市場への関心も高く、今後の日豪経済関係の深化においても重要な拠点となることが期待されている。

移民政策に関しては、特に学生ビザにより流入する若年層への対応が課題とされており、コントロールの必要性が指摘される一方で、IT技術者や研究者などの高度人材については積極的に受け入れる方針が示されている。この移民政策の考え方には、国際都市としての持続可能な成長を目指すうえでのバランス感覚が表れている。

今回の訪問を通じ、都市間での課題共有や情報交換の意義を再認識するとともに、神戸市としても経済・教育・人材交流の面で一層の連携が可能であると感じた。またブリスベン市内の高校では校長の裁量で伝統的に第二外国語に日本語を選択する学校が多く、簡単な日本語を習得している市民も多くおり、今後の上記連携を進めるうえでも大きなアドバンテージである。姉妹都市という特別な関係を活かして今後のさらなる連携に取り組みたい。

（文責：村上立真）



石川在ブリスベン日本国総領事表敬

2、シュリナー・ブリスベン市長表敬（22日15：00）



ブリスベン市本庁舎において、ブリスベン市のエイドリアン・シュリナー市長を表敬訪問した。神戸市からは久元喜造市長が出席し、議会側からは菅野吉記議長を筆頭に、日豪友好神戸市会議員連盟の我々議員も同席した。

今回の訪問は、神戸・ブリスベン両市の姉妹都市提携 40 周年を記念する節目として実施されたものであり、両市の長年にわたる交流の成果を確認するとともに、今後の連携強化について意見交換を行った。会談ではまず、神戸空港の国際化の進展が話題となり、関西圏の国際交流拠点としての神戸の役割強化や、ブリスベンとの直行便の可能性など、航空ネットワーク拡充に関する関心が共有された。また、2032 年に開催予定のブリスベン・オリンピック・パラリンピックに向け、都市間の協力関係の深化や、市民レベルでの文化・スポーツ交流の拡大についても意見が交わされた。

さらに、これまでの神戸市のオーストラリア訪問実績や、学術・環境・観光など多分野にわたる交流の成果を踏まえ、今後は「形式的な姉妹都市関係」にとどまらず、経済的・教育的・観光的な実益を伴う協働関係へと発展させていくことの重要性が確認された。特に、将来を担う青少年の相互派遣や、大学・企業間連携を通じた次世代の人材育成など、具体的な交流分野の拡大に向けた検討を進める必要がある。



また、菅野議長をはじめとする日豪友好神戸市会議員連盟の今回の訪問を契機として、これまでのシアトル市議会との友好議会締結の先例を踏まえ、ブリスベン市議会と神戸市会との間においても「友好議会協定」を締結することが、両市議会の交流促進および将来の連携強化にとって極めて有意義であると考えます。（文責：上畠寛弘）

3、多文化共生セッション (22日16:00)

オーストラリアの多文化共生政策に関し、MILPERA High School ジュリー ピール校長より以下の説明があった。

当校には、世界 35 か国から生徒が集まり、生徒の母国語は 60 言語にもものぼる。州立の英語学校で 11 歳から 18 歳を受け入れている。費用は州が負担している。職員たちで 20 の言語に対応ができるようにしている。生徒の母国語を話せる職員がいることが重要であると考えられている。ブリスベン市国際課の職員で今回の視察の対応もしてくれている、[REDACTED] 氏も、12 歳のときに台湾から渡豪して、この語学学校で学んだ経験があり、様々な国から訪れた生徒は、その後、オーストラリア国内で活躍をする人材へと成長していつている。中にはオーストラリアに 14 歳で来る前に 4 年しか教育を受けていなかった生徒が、現在は弁護士として活躍している事例もあった。当校の生徒の半分は国外から亡命してきた生徒で、もう半分は国内から仕事のスキルを得るために来ていて、すべて外国人である。アフガニスタン、コンゴ、イラン、ソマリアなどからきた生徒が多く、満足な教育を受けてきていない生徒も多い。アフリカからは亡命ビザ、南米や東南アジアからは親のスキルビザ（職業訓練ビザ）で入国している。ここ数年は、ウクライナやロシアからも来ている。日本人も 3～7 人が在籍している。英語がバックグラウンドではない生徒のために、通常のオーストラリアの教育プログラムの 2 倍のスピードで教育を提供していることが特徴的であった。また、英語の学習のみならず、国に馴染むことを意識して地域に溶け込めることを重要視されていた。加えて、通常のオーストラリアの学校へ移行させるのが、この学校の使命として運営されている。語学習得については、10 週間ずつのタームで進めていて、10 週間に 1 度面談をして、語学レベルを確認している。ビギナークラスではひとつずつの単語から勉強していき、その次のクラスでは、ショートストーリーなどの文章で勉強するという流れで進めて行っている。その後、最終的には市役所訪問など、実際の体験の中で英語を使う訓練をしていき、12 か月～18 ヶ月で英語が習得できている。社会的なサポートとしては、クラスでペアを作ってフォローしあうことをしたり、25 名ほどの生徒の母国文化についても理解した補助教員がサポートしたり、150 名のボランティアにも協力してもらっていたりする。様々な地域理解を深めるイベントをしており、生徒の家族も含めて、自転車の乗り方についてのレクチャーをするようなイベントなどを開催している。

以上の説明の後で、ピール校長より、2つのバックグラウンドを持ち、2つの言語を話せる人が増えることでオーストラリア文化がつけられていくとのコメントがあり、オーストラリアの多文化共生の原点を理解する機会となった。（文責：吉田健吾）



多文化共生につき説明するピール校長

4, カラワサ・フォレスト訪問（23日09:00）



・カラワサ・フォレストの概要

カラワサ・フォレストはブリスベン市で最大級、1,050 ヘクタールの広さを持つ自然保護区のひとつで、公園として整備されている。カラワサ内にはユーカリ林、メラルーカ湿地、湿性ヒース、淡水ラグーンなどが16の地域生態系を有し、絶滅危惧種も含む320種の在来植物が記録されている。

・ディスカバリー・センター

公園の入り口となるディスカバリー・センターはカラワサの生物多様性について学ぶことのできる施設となっている。子供の学習にも活用されており、小さな昆虫を探したり、森林内を飛ぶ鳥の目線になってみたりといった多くの仕掛けで、視覚だけではなく聴覚、触覚、臭覚に訴えるような展示となっている。

・カラワサ森林とブリスベン市の生物多様性保全

公園の有する機能や、市としての生物多様性保全の取り組みについてディスカバリー・センターでレクチャーを受けた。

オーストラリアへの入植以降、住宅や都市インフラの建設、燃料のための伐採などによって森林が影響を受けてきた。1880年代には森林地帯に採石場が設立されたが湧水の問題で1980年代に閉鎖。地元住民や環境活動家が開発によって失われつつあるブッシュランド（低木林地）の生息環境に対処するため、1991年にカラワサ保護協会が設立された。協会は地方政府や州政府に働きかけ、カラワサ森林の環境的・文化的価値を守る活動を続けている。現在も存続し、環境教育や生物多様性保全を推進している。

1990年代から2000年代にかけて、カラワサ・フォレストはブリスベン市とクイーンズランド州政府による土地取得や寄贈で拡大した。2000年代初頭には森林から家畜（牛）を排除し、来訪者向けのフェンス設置や侵食対策、雑草管理、トレイルやピクニックエリアの整備が行われた。2006年には軍や警察と連携してクリーンアップ・オーストラリア・デーに採石場に沈んでいた51台の車を撤去した。2015年にはディスカバリーセンターが建設された。

カラワサ・フォレストはスラックス・クリークとスクラビー・クリークの源流で、フリンダーズ・ピークまで60kmにわたる生態学的回廊を形成しており、動物の移動のために道路上に橋やトンネルが整備されている。また、700km以上の歩道や200kmのフェンス、ピクニックエリアやバーベキュー設備、消防用水タンクなどが整備されている。

公園の管理は、市の「自然環境・持続可能性課」と連携して活動している。公園の管理を行う「Public Space Operations」には、常に屋外で活動している実働チームや、技術チームがあり、ブリスベン市にある140の保護区の81の異なる生態系と2500種の固有の野生動物を支えている。

「Public Space Operations」では公園の管理だけではなく、生物多様性プログラムも実施しており、その中には雑草駆除と生息地回復を行う「Wipe Out Weeds (WOW)」プログラムや、再植林プログラム、また火災管理プログラムなど多様な活動が含まれている。「Wipe Out Weeds (WOW)」では0.25ヘクタールごとのグリッド単位で保護区全体を管理し、雑草を別のエリアに後退させ固有種を守ってきた手法について詳細に紹介された。

・ 火災管理プログラムについて



カラワサ・フォレストでは敢えて管理の下で森に火を放つことで森林の環境保全を行なっている。放火や落雷などによる火災とは異なり、計画的火災は、保護区をブロックに区分し、毎年特定のブロックを燃やすことを継続している。焼けた部分と未焼のブロックが交互に存在することで、昆虫や小動物の避難場所を確保し、多様な段階の植生が保たれる。

火災はオーストラリアの生態系に不可欠なプロセスであり、「火がなければユーカリ林もコアラも存在できない」と言える。多くの植物は火災による熱・煙・化学的刺激で発芽する。例えばザハキアという植物は、大きな木質のさやに種子が包まれており、これが開いて種子が放出されるには非常に高温の火災が必要とされる。また、火災や嵐によって生じる樹洞を繁殖や子育てのために必要とする鳥や樹上性哺乳類もいる。火災後活性化される菌類も生態系の中で重要な役割があるなど、多くの生物にとって火災は重要な自然現象である。

市では 20 年にわたって火災後の植生反応をモニタリングしている。2019 年の放火による山火事でアカシアが繁茂した地域では、2023 年に低強度火災を実施し、他の植物が再び育つよう環境の調整を行なっている。

日本でも近年、山林火災が多発し問題になっている。参加者からは「どのように住民理解を得ているのか」といった質問が出たが、やはり住民への丁寧な対応、また煩雑な手続きを伴うなど苦労はされているとのこと。

都市近郊では学校、介護施設、送電線、主要道路など重要インフラが隣接しており、ピーク時交通なども考慮しながら火入れを行なっている。夜間や湿度の高い季節

に安全に火を扱うが、温暖化により火災の起こりやすい夏が長期化しており、安全に火入れできる機会は減っているという課題がある。

レクチャー後、公園内でブリスベン市議会議員 Steven Huang 氏が立ちあわれ、神戸市とブリスベン市の姉妹提携 40 周年を記念し植樹が行われた。



今回は広大な公園のほんの一部しか見学することができなかったのは残念だったが、短い時間内でもオーストラリア固有の虫や鳥の姿を目にすることができ、都市近郊においても、生態系の保存に多くの予算や労力を割いているブリスベン市のあり方を感じることができた。参加者からは、神戸の森林植物園や動物園、科学館など社会教育施設ですぐ活かすことのできる取り組みを見ることができたとの声が聞かれた。

(文責：平井真千子)

5、ブリスベン・シティ・マーケット視察（23日12：00）

7月23日12時よりブリスベンスクエアにて「Brisbane City Market」を視察した。本マーケットは、毎週木曜日午前8時から午後2時まで開催されており、ブリスベン中心部に位置し、都市再開発地区であるクイーンズワーフのにぎわい創出に貢献している。以下の特徴が挙げられる。

多国籍で健康志向の食・商品展開がオーストラリアらしく多様な顧客層を引きつけている点、木曜日という平日開催・中核都市の導線上立地により地域の日常利用を促進している点、都市再開発エリアとの連携によりマーケットそのものがまちの活性化につながっている点の3点である。

当日は、多国籍のストリートフードが立ち並び、特にアジア、中東、欧州など多様な文化圏の味が手軽に楽しめるよう工夫されていた。グルテンフリーやオーガニックといった健康志向の食品も多く見られ、来訪者の食に対する高い意識が感じられた。これは、現地の人々のライフスタイルや嗜好を色濃く反映したものと思われ、神戸市における今後の都市型マルシェの在り方にも示唆を与えるものである。

開催場所であるクイーンズワーフは、カジノ・ホテル・商業施設・公共空間の複合開発が進む注目のエリアであり、当該マーケットは通勤・通学・観光客の動線上に立地する。そのため、出勤前の買い物や昼食休憩中の立ち寄りに適した機能を備えており、平日開催にもかかわらず多くの人で賑わっていた。こうした生活動線に即した立地選定は、神戸市内での導入においても重要な視点となる。

出店内容は、農産物やギフト雑貨など幅広く、単なる物販にとどまらず、都市生活の質を高める「体験の場」として機能していた。一方で、クイーンズワーフ全体の整備はまだ途上であり、高級小売店舗の誘致が不調に終わったとの報道もあり、今後の課題である。

神戸市においても、中心市街地とウォーターフロントを結ぶ空間を活用した都市型マーケットの展開は十分に可能であり、特に多文化性・健康志向・平日開催という点において、ブリスベンの取り組みは参考となる。都市生活に寄り添う柔軟な発想とともに、来街者・就業者の回遊性を高める装置として、今後の施策に取り入れるべき事例であった。

(文責：村上立真)





6、ブリスベン市エネルギー政策に関するレクチャー(23日14:30)

ブリスベン市当局より、市の環境政策およびエネルギー政策についてレクチャーを受けた。ブリスベンは「リバーシティ」と呼ばれる亜熱帯都市であり、平均最高気温は26.7℃、年間降水量は1,012mm。人口の36%が海外出生者で、経済規模は1,810億ドルに達する。114kmのブリスベン川と4,000kmを超える水路を有し、800種以上の野生動物と2,500種以上の在来植物が生息している。

市議会は「Brisbane. Clean, Green, Sustainable」を掲げ、持続可能性および環境保全を推進している。管轄面積は1,342.7平方キロメートル、予算は41億ドル、人口は120万人を超える。市域の38.9%が自然生息地であり、公園は2,100か所を超える。2032年までに炭素排出量を30%削減し、2050年にネットゼロを達成することを目標としている。市のビジョンは「清潔で、緑豊かで、持続可能な都市として認められること」であり、5つの柱を以下のとおり掲げている。

- A Sustainable City: 国連 SDGs および気候関連情報開示に整合。地域住民、先住民コミュニティ、地域団体、民間との連携を重視。
- An Adaptive City: 将来リスクを理解し、強い統治とリーダーシップのもとで、備え・対応・復旧の計画を実施。
- A Clean City: 清浄な空気・水域・エネルギーを目指し、21,000枚を超えるソーラーパネルを設置。年間13GWhを発電し、約9,500トンのCO₂を削減。バス車庫・環境センター・廃棄物処理施設すべてにソーラーを導入。2016~2025年度において総発電容量は約8,000kWに拡大。
- A Green City: 16,800ヘクタールの公園・自然地域を維持し、毎年13,500本の植

樹を実施。12,000 ヘクタール以上の自然生息地を保全。市域の 39% (4.4 万ヘクタール) が自然地で、そのうち 1 万ヘクタールが保護区。

- A Future City：世界水準の屋外空間、歩きやすい都市、緑化による冷却、再生可能エネルギー、生物多様性との共存、強靱な都市を目指す。

主要な実績として、埋立ガスから年間約 5 万 MWh の再生可能エネルギーを発電し、Hanlon Park/Bur'uda 水路再生プロジェクトで 4 つの国内賞を受賞している。新設のカンガルーポイント橋には 40kW のソーラーを設置し、「Excellent」評価を獲得。ブリスベン・メトロ・デポには 1MW のソーラーを設置(約 270 世帯分の電力相当)。高頻度の電動メトロを導入し、終点での急速充電と夜間の低速充電により効率的な運行を行っている。また、地域協働として、70 クラブに 1.4MW の屋上ソーラー (3,200 枚) を設置し、年間 2.1GWh を発電、約 1,500 トンの CO₂ を削減。さらに 7 つの公共プール施設に 0.5MW (1,200 枚) のソーラーを設置し、年間 0.8GWh を発電、約 600 トンの CO₂ を削減している。電力供給に関しては、「100%再生可能電力契約 (Renewable Power Agreement)」を締結し、110MW 規模の Darling Downs Solar Farm から再生可能エネルギーを調達している。

レクチャーの中で、市当局はエネルギー政策の推進に強い自信を示していたが、ソーラーパネルの原産国について質疑したところ、ほとんどが中国製であることが判明し、この点については苦々しい表情での答弁であった。また、メガソーラーによる森林破壊の懸念について質問したところ、平地を活用した設置を行っているため、そのような事例はないとの説明があった。(文責：上畠寛弘)

7、ブリスベン市主催歓迎レセプション (23 日 18:00)

23 日夕刻にブリスベン市主催の歓迎レセプションが開催された。

冒頭、地元ミュージシャンがアクノレヅジメント・オブ・カントリーと呼ばれる、先住民や土地への感謝と敬意を表明する儀式をアレンジした歌の披露があった。エイドリア・シュリナー市長や久元喜造市長の挨拶があったが、日本とは様式が異なり、レセプションは司会の仕切りがないままスタートして、来賓挨拶が中盤に設定されていた。レセプション参加者は約 180 名で、ブリスベン市の行政、経済界の方々や、日本人の方々、日本からの留学生が集まってくださり、意見交換ができた。人以外にもコアラやワニなどの動物も会場横に連れてきてくれていた。ブリスベン市のあるクイーンズランド州はコアラとの触れ合いが認められていて、ワニやヘビとともに触ることができ、貴重な機会となった。(文責：吉田健吾)



シュリナー市長の歓迎レセプションでの挨拶

8、Kangaroo Point Bride 訪問（24日08：00）

カンガルーポイント設計会社事務所において、ライアン・マーフィー・ブリスベン市議会議員、[REDACTED]・ブリスベン市役所橋脚・大型設計担当等より以下の説明を受けた。

（1）冒頭、ライアン・マーフィー議員より挨拶があり、姉妹都市 40 周年のお祝いの言葉があった。ブリスベンと神戸は共通事項がある。共に災害に強い街だということである。神戸は震災、ブリスベンは水害やサイクロンがあったが共に復興を果たしている。地理的共通事項もあり、水の景色が共通している。神戸は港（メリケンパーク、ポートタワー）、ブリスベンは川（サウスパーク、カンガルー・ポイント・グリーンブリッジ）が街の景色を作っている。

今日はカンガルー・ポイント・グリーンブリッジの視察という事だが、この橋は現市長が第一の選挙公約として掲げたものである。この橋は堅固な建物となっており、95 メートルのマストはオーストラリアクイーンズランド州で一番高い建造物である。また本州では初めての斜橋であり、国際的な建築家を集めて設計し、32 のスチール梁で支えられている。

そして、利用者が予想以上に多くこれまで 200 万人以上が利用した。これは予想の倍以上である。この橋は 1 日 10 万人が利用している。公共の便が良くなった事と車の利用減に繋がっている。この橋は数々の賞を受賞しており、後ほど実際に橋を視察していただくが、1800 年代からこの橋の計画は始まった。1800 年代は非常に昔というイメージがあるが、私が東京に行った時に趣味である盆栽を見たのだが、1800 年代の盆栽を見かけた。オーストラリアと日本の昔の感覚は違っている。ブリスベン市はまだまだ若い市である。40 年間に渡る神戸市からの指導に感謝している。今後とも宜しく願いたい。

カンガルー・ポイント・グリーンブリッジは、2024 年 12 月に開通し、ブリスベン市が推進する環境に配慮した歩行者・自転車専用の橋で、気候変動対策や都市の持続可能性向上を目的としたグリーンインフラの一環である。場所はブリスベン市中心部とカンガルーポイントを結ぶ橋である。全長約 460 メートル、総工費 2 億 8800 万オーストラリアドル（約 290 億円）で建設され、利用者は歩行者、自転車利用者、キックボード等で構成されている。この橋は環境配慮型グリーンブリッジとして設計されており、ソーラーパネルを橋の屋根や照明設備に設置している。ソーラーで発電された電力を夜間照明や電動交通システムに利用している。また LED 照明を採用しており、夜間電力を大幅削減している。

(2) ・ブリスベン市役所橋脚・大型設計担当の説明

私は、この橋については予算から設計まで重要な計画に携わることができ感動している、また、この橋は自分の子供のように思っている。この橋を建設にするにあたってはいくつかの候補があったのだが、1860 年計画開始、2014 年概念の研究が始まりこの場所に決まった。橋の建設に関しては一番重要なことが、交通の利便性、流れであり、歩行者、電動スクーターなどの往來の経路が考慮された。橋の建設の目的は、市民交通利用だけでなく、交通のスムーズさ、市民エキササイズ、いかに自動車の削減につなげるか、観光客を呼べるかの観点からも考えられた。船の航路も検討されたのだが、船舶の往來の幅、水面からの高さなど綿密に計算された。都市景観といかにマッチするのかという点にも考慮に入れた。橋の両サイドの設計もまた重要な点であり、レストランバーとカフェを設けたことで、ビジネスだけでなく市民のくつろぎスペースや観光の集客目的でもある。是非その辺りを見ていただきたい。

(3) サンドラ・ニールセン BE SIX 建設マネージャー

複雑な橋については専門家や世界的な設計者（イタリア・デンマーク・カナダ）も呼んで建設した。クイーンズランド州はサステナブルな取り組みをしており、インフラ持続可能な建設強化し、デザイン評価を取得している。ライフサイクルの 59%の排出量を削減し、建設における排出量 19%を削減して地元の鋼材を調達している。

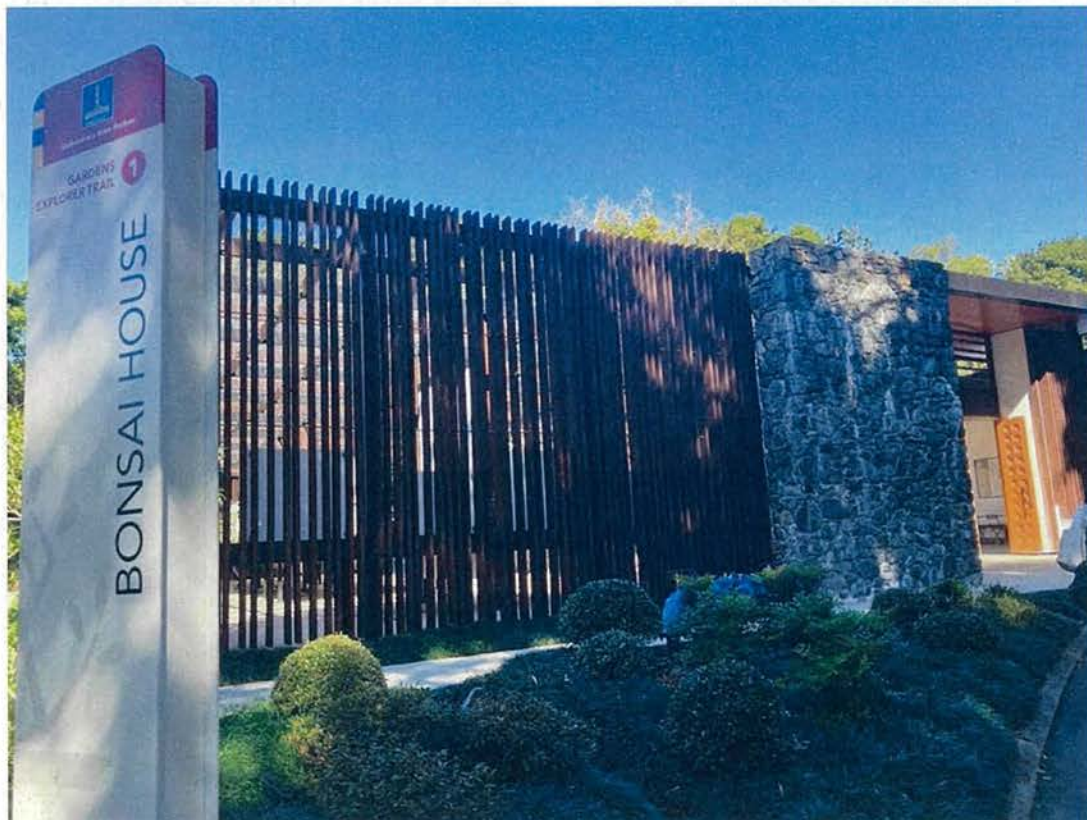
パワーポイントの説明においては、社会的利益について説明。スキル向上と研修、都市建設のランドスケープデザイン、エンゲージメント、サプライヤーとの関わり、知識共有の研修、64 人に見習い研修、14 人の訓練生、33 人の先住民のスキル向上に繋がる。そして、ブリスベンで一番高いブリッジとなった。

橋の特徴としては、スパンはクレーンを使ってリフトした。橋においては、水の流れ以上に風の動きが重要である。1940 年に一度失敗した橋があり、それを教訓にして風洞実験やデッキの断面実験をした。地震対応としてチューニングダンパーを設けたのだが、地震がない国なので特別に必要ではないが、将来的なことを考え設置した。デジタルモデルを作成して全て上記事項を実験して作成した。複雑な設計なのでデジタル設計して、ただの橋ではなくてアイコニック（象徴的）なものとして設計した。物流に関しては物流施設を他に設置してそこから運び建設した。（文責：住本かずのり）

9、Bonsai House 訪問（24日10：45）

クイズランド州ブリスベン市近郊にあるマウントクーサ植物園を訪問し、マウントクーサ植物園オペレーションスーパーバイザー  氏より説明を伺った。

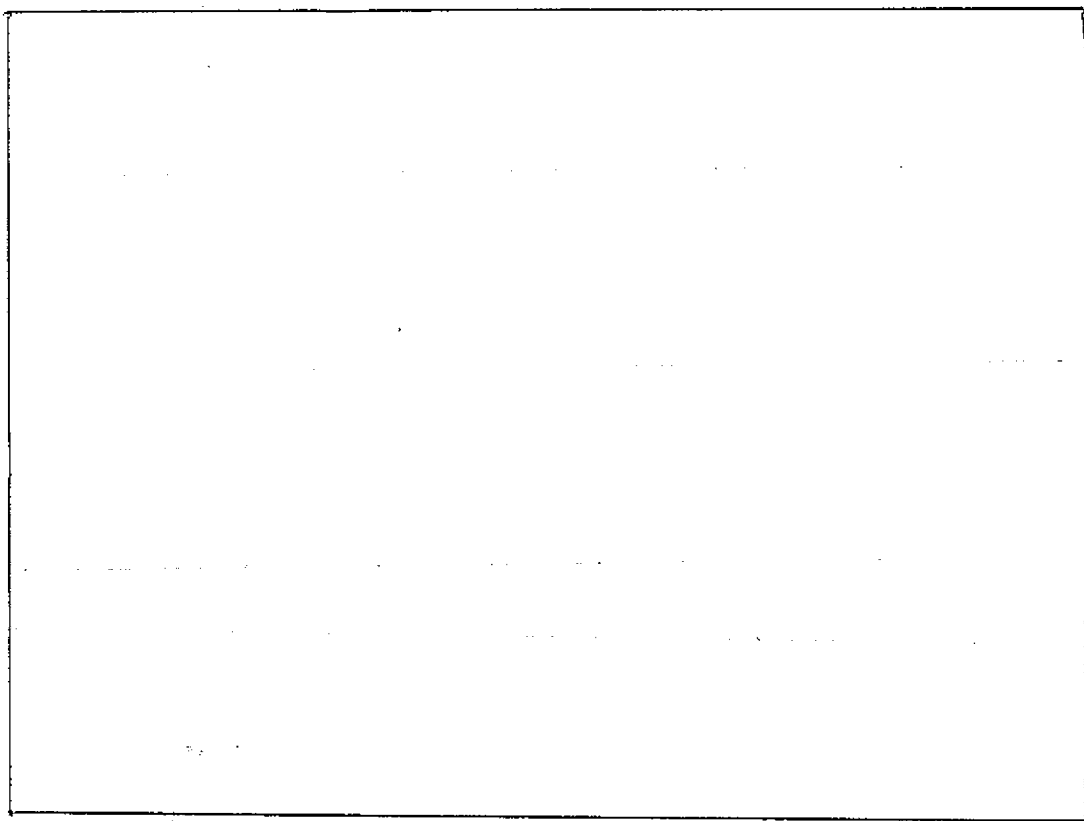
マウントクーサ植物園は、ブリスベン市中心部からバスで 20 分の距離にあり、1970 年に整備が開始され、1976 年に正式開園された植物園で、ブリスベン市の洪水リスク低減と施設拡張のために整備された。面積は、約 56 ヘクタールあり、広さで言うと甲子園球場の約 14 個分に相当する。



Bonsai House 入口

植物園の入口付近では、「Lagoon and Bamboo Grove」と呼ばれるエリアがあり、池や水たまりを中心に、さまざまな種類の竹が森林のように密集しており、世界各国から数十種類の竹が移され生えている。日本の竹もあるが、竹の太さや背丈が大きい台湾生息の竹も着目すべき竹であった。現場の空間は、穏やかな竹林の雰囲気と水辺の景観が調和し、都会の近くとは思えない美しさに包まれていた。

竹林周辺には、カメやトカゲ、アオサギなどの動物を観察でき、生物多様性の観点からも自然と共生している植物園であることが確認できた。



氏による説明



日本庭園には、茶室が2室あり、6つの石灯籠が庭園に配置されている。1988年に開催されたエキスポ(ブリスベン国際レジャー博覧会)における日本館の庭園設計者として、小形研三氏によるテーマで形作られている。当時の日本庭園は、ブリスベン市に寄贈され、1989年2月にマウントクーサ植物園で展示されることになる。当時は、建設費の一部を神戸市(6つのセクション)から寄附があり、山と川をモチーフにした庭園が完成した。水を循環させ、池には睡蓮が浮かび、日本庭園が持つ静けさを大切にする設計であり、日本にいるかのようなリラックスできる雰囲気であった。



日本庭園から少し歩くと盆栽ハウスに辿り着き、日本文化を象徴する伝統園芸・盆栽の専門展示施設であり、ブリスベン市民及び訪問者へ日本文化への理解を促す文化的拠点となっている。約 80 鉢以上の盆栽が展示されており、オーストラリアでは最大級の公共盆栽施設でコレクションも豊富である。展示物は、日本の盆栽だけでなく、ブーゲンビリア、ツツジ、フィカス(イチジク類)なども展示されていた。

盆栽ハウスには、神戸市から石灯籠と日豪友好神戸市会議員連盟からは盆栽鉢 2 基が寄贈されている。





初期の盆栽ハウスは、1999 年に開設され、レノ・ウェッバー氏の個人コレクションが寄贈され、オーストラリアの気候風土に適した在来種を巧みに盆栽として仕立てたものが多く、人々を魅了するとともに、日本文化への理解と国際的な交流促進に重要な役割を担っている。そして、ブリスベン市のアドリアン・シュリナー市長は、2022 年の盆栽ハウスの再整備セレモニーで姉妹都市神戸市との文化交流を象徴する施設としての意義を強く語られている。建物も下はサンドストーン、木材は地場のものを使用し日本を象徴した作りになっている。さらに、2024 年に在ブリスベン日本国総領事館主催のイベントで、胡摩窪総領事が盆栽ハウス完成式典に出席されている。



アドリアン・シュリナー市長は、ブリスベン 2032 年夏季オリンピックはスポーツのみならず、文化・教育・観光の各分野における国際交流を深化させる絶好の機会となり、この世界的なイベントに気運を盛り上げていきたいと話されていた。

当日は、小さな子供を抱えている家族も訪れており、日本庭園等を満喫していた。今後は、日豪双方の文化が共鳴する素晴らしい空間により多くの来訪者を期待したい。

(文責：高橋としえ)

10、豪日協会主催ネットワーキングランチ（24日12：30）

24日12時30分より14時00分の間、クライトンウッズ法律事務所において豪日協会主催のネットワーキングランチが開催されたところ、概要次の通り（登壇者：ディビッド・シード豪日協会クイーンズランド支援会長、石川在ブリスベン日本国総領事、久元神戸市長、菅野神戸市会議長）。

(1)はじめに、ディビッド・シード会長より、両市の姉妹都市提携40周年を祝福するためのネットワーキングランチを本会場で開催することに感謝する、ブリスベン市にとって神戸市は最初の姉妹都市であり、長年にわたり良好な関係を維持してきたことを称賛したい、経済交流やネットワークにより相互の関係をさらに緊密化させる上での本行事の開催意義

を強調したいとの歓迎スピーチを行った。

(2) ついで、石川総領事は、両市の関係は文化・教育・スポーツ・災害支援など多分野にわたる厚みのあるものであり、阪神・淡路大震災（1995 年）やブリスベン洪水（2011 年）における相互支援の実績を挙げ、両市の絆の強さを強調した。また、神戸市が 2024 年パラ陸上世界選手権を開催したことを踏まえ、2032 年のブリスベン五輪・パラリンピックへの示唆や連携可能性に言及し、本日の夕方から開催される「国際ブリスベン生物多様性フォーラム」への久元市長の参加に触れ、両市が共有する環境課題への対応と協力の意義を強調した。



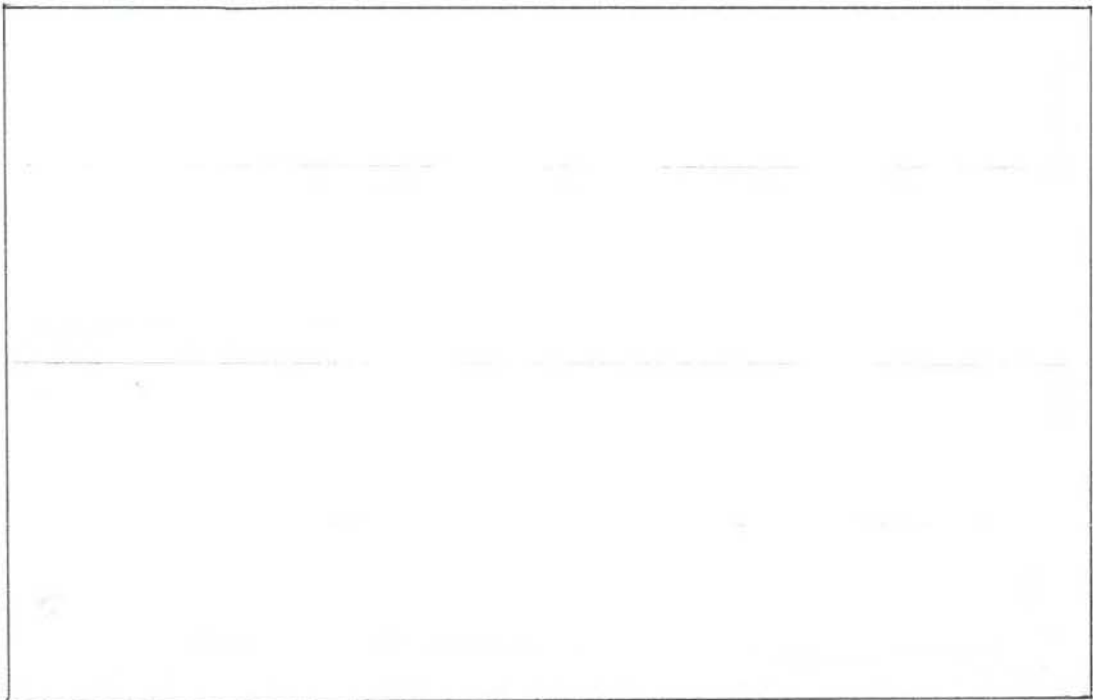
石川総領事挨拶

(3) 久元市長からは、豪日協会の長年の貢献に謝意を表明するとともに、両市の友好関係は、市民、企業、大学、そして国レベルの外交関係を基盤として築かれてきたことを説明した。また、複雑化する国際情勢の中で、日豪両国の関係強化が求められている点を指摘し、地方都市間でもその関係を支える連携を継続する意向を表明し、気候変動に伴う台風・サイクロン・海面上昇などの災害リスクへの共通課題に触れ、学术界・経済界・行政が協働し、都市間で知見を共有する重要性を強調した。さらに、神戸空港の国際化とブリスベンの経済発展（2032 年五輪開催を含む）を好機と捉え、経済・学術・行政間のネットワーク強化を進めていく旨述べた。



久元市長による答礼挨拶

（４）菅野議長は、ブリスベン滞在４日間を振り返り、これまでの４０年間にわたる両市の連携の深さに感銘を受けたと述べるとともに、特に教育、スポーツ、環境保全の分野における共生の精神を評価するとした。また、「盆栽ハウス」整備の経緯に触れ、神戸市からの石灯籠や神戸市会からの鉢の寄贈を通じた文化交流の象徴として紹介した。さらに、神戸のラグビーチーム「コベルコスティーラーズ」のヘッドコーチに、元オーストラリア代表監督デイヴ・レニー氏が就任していることを紹介し、スポーツを通じた絆にも言及し、最後に、今後の展望として、ブリスベン五輪、神戸空港国際化を機にさらなる交流の促進を誓うと述べた。（文責：のまち圭一）



ネットワーキングランチ交歓会

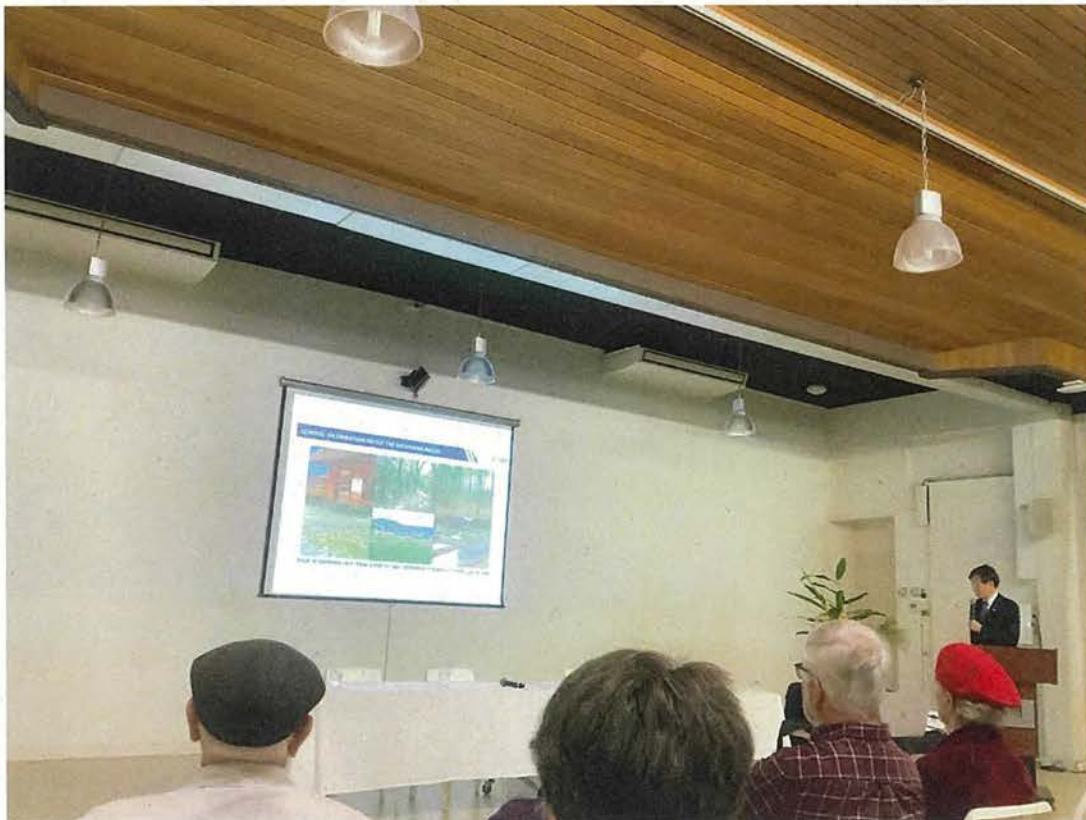
11、ブリスベン市・神戸市共催生物多様性セミナー（24日16:00）

24日16時00分より18時00分の間、マウントクーサ植物園多目的会場においてブリスベン市・神戸市共催の生物多様性セミナーが開催されたところ概要次の通り。

（登壇者：久元喜造神戸市長、石井弘明博士（神戸大学大学院農学研究科教授／森林生態学／都市林分野）、Dr. Sean Fitzgibbon（クイーズランド州立大学）、 女史（ブリスベン市役所））

（1）はじめに、久元市長より神戸里山戦略について以下の説明があった。

神戸市は都市部もあるが、人と里山が共生する社会が存在し、人による里山地域の利用が減少し、外来生物が増え、日本古来の生物が絶滅危惧種となっている例もある。外来生物の例としては、カミキリやヒアリ、ミシシippカメなどが挙げられる。また、地域に生息する固有種としては、セトウチサンショウウオが挙げられる。そこで、里山を守るため2023年1月に神戸里山戦略を策定しており、環境DNAによるモニタリングや神戸市北区の里山地域が自然共生サイトに認定（国）、国連の国際データベース機関(OECM)に登録もされている。

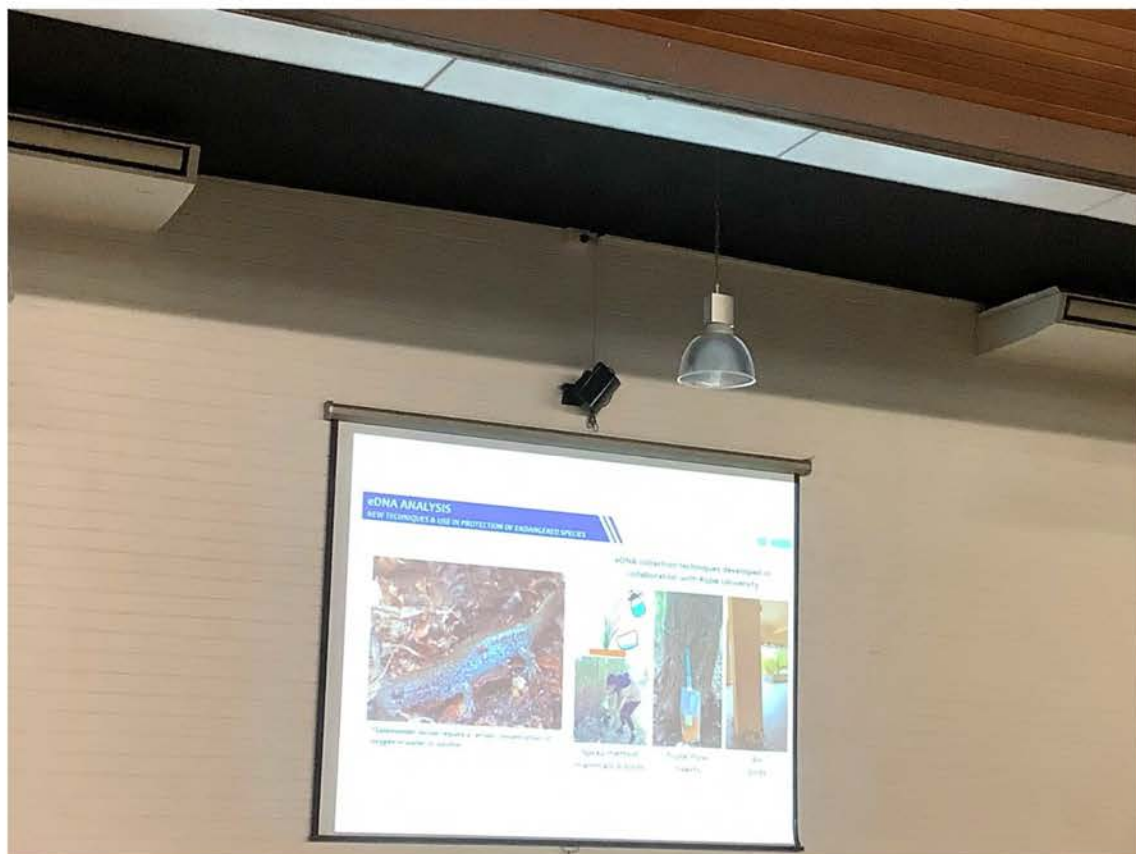


神戸市では、外来種センターを設置しており、毎週末に一般公開している。そこでは、ミシシippカメやヒアリなどの外来生物を飼育・展示している。当該センターでは、見て学ん

で相談できる体制が整っている。

(補足)

神戸里山戦略とは、里山の保全・管理・利用を市民・企業・学校・NP0・行政が連携して進めるための基本方針と具体的な施策の枠組み。



(2) 次いで石井教授より都市林についての報告があった。

都市林の再生・管理については、神戸市内の都市林（里山森林）について、長期にわたり構造・植生をモニタリングし、一度の植栽だけでは成熟した自然林の構造には達しない。間伐による多層構造の形成と継続的な管理と自然分布種の確保の重要性を説き、「自然林との構造比較に基づく評価フレーム」を提唱している。

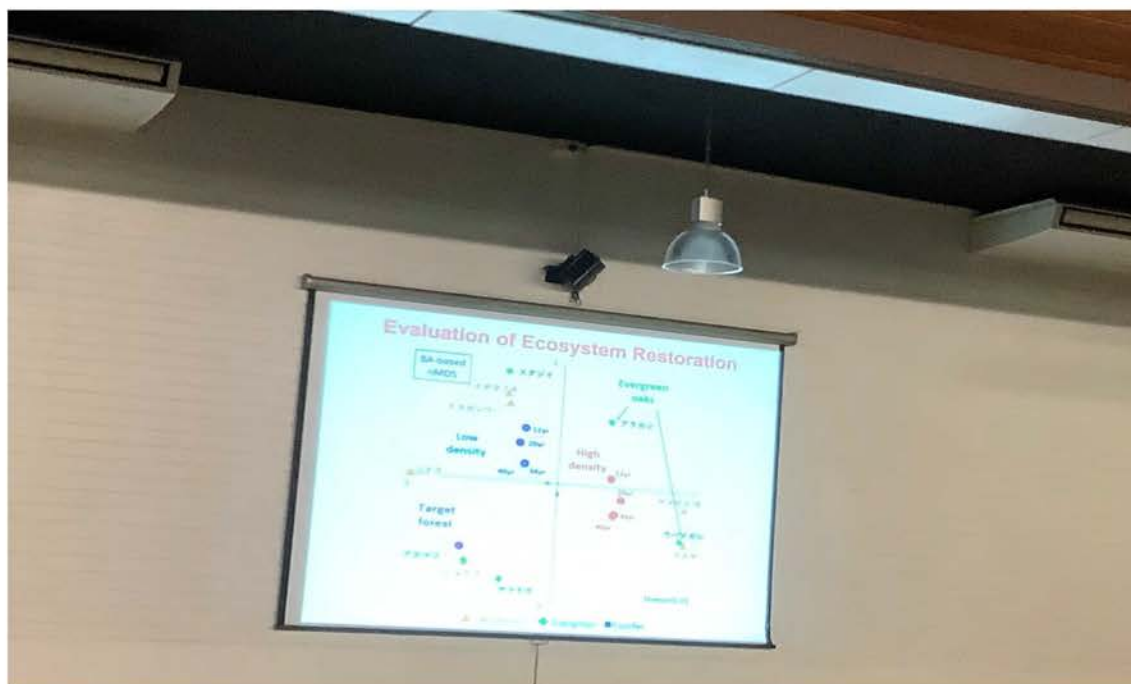
樹木生理については、LiDAR（レーザー測量）手法を用いた樹冠構造の定量化や、樹木体内の通水組織の機能的多様性の解析（例：樹木の気候変動への順応能力）を進めている。

森林キャノピー研究については、木部の柔細胞と水分通導・防御機構、乾燥耐性や通水回復に関する形態学的・生理学的メカニズムを対象とした研究にも取り組んでいる。

※用語説明

樹木生理とは、樹木という長寿命・大型の植物がどのように成長し、生き延び、環境に適応しているのかを解き明かす学問分野。簡単にいえば、木の「体の仕組みと働き」を研究する領域である。

森林キャノピー研究は、樹冠層は、森林の最上層に位置する 樹木の葉や枝が密に広がった層 のことで、構造と機能、生態系における役割を解き明かす研究。



(3) Sean Fitzgibbon 博士からは、コアラ個体群の強靱化について行動生態学の観点より説明があった。具体的には、過去にはコアラが疾病（クラミジア）に感染し、一定規模の個体数の感染が確認された。ベルモント・ヒルズ保護区に生息するコアラ個体群の 60% が当初クラミジア感染にかかり、感染対策としてワクチン接種や外部からの健康個体コアラの導入により、感染減少や繁殖再開にこぎつけた。地方自治体と大学、獣医関係者などとの連携により、健康なコアラ個体群の状態に立て直した。

また、コアラの活動範囲・行動パターンや熱環境を解析した研究、GPS やマイクロチップを活用したモニタリング技術導入、都市開発による影響などについても研究発表しているとの説明があった。



(4) 女史からは、ブリスベン市における脊椎動物は約1,000種類にのぼり、過去8年間のプログラムにより、コアラを保全していくためのコアラ生態系を Sean Fitzgibbon 博士とともに研究しているとして以下の説明があった。

コアラ検知犬を使い、コアラの糞を採取し、病気の有無を調査した結果、若いコアラがクラミジアに感染しており、発見場所では弱っていた。クラミジア感染が原因となってコアラの死亡・不妊などが起こるため、クラミジア感染を抑制していくことが課題であった。特に、繁殖年齢前の若いコアラや再発歴ありのコアラにワクチン接種を優先的に展開した。急性期のコアラに対しては、抗菌薬を使用し、長期予防や再発抑制のコアラに対しては、ワクチン接種を実施した。

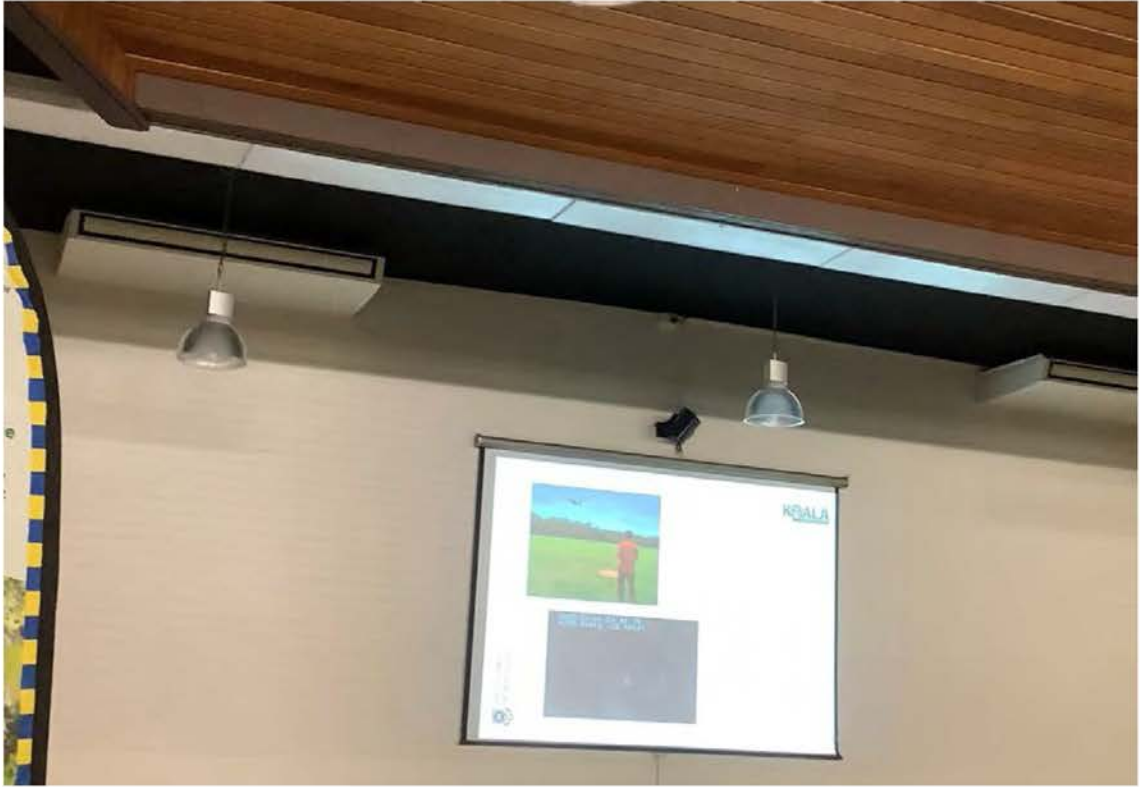


コアラの死亡には、交通事故や都市開発、犬による攻撃、親からのクラミジア感染など多くの事例があるが、人間には感染せずに、クラミジア感染した場合は、コアラの目が真っ赤になる症状が出る。治療で回復したコアラは、ブッシュランドに返さない、つまり病原菌がいない地域に返す取り組みを実践している。



都市部では、コアラの移動に際して、移動経路を設けて移動の連結性を確保している。別の視点では、ドローンでのコアラ検索を実施しており、朝4時から5時にかけてドローンを飛ばし、発見したコアラに麻酔をかけて健康かどうかをチェックする。健康でないコアラに関しては、治療をした後は、コアラが分散するように移動させ、正常なコアラの発育に貢献している。今後はコアラの繁殖活動にも期待しているところである。

(文責：山本のりかず)



第二部 ブリスベン市訪問団団員所見

1、平井真千子団長

今回の訪問では視察やフォーラム開催など生物多様性保全が大きなテーマであった。神戸市の森林や里山は歴史のあるものだが、保全の活動は緒についたばかりだ。オーストラリア、またブリスベンにおいては先住民の文化への敬意を持ちながら、固有の植生を守るということに市もかなりの予算を割いて取り組んできており、市民理解も広く得ていることが感じられた。近年の日本では山火事の頻発や、野生動物との共生が大きな問題となっているが、積極的な生態系管理へ、今後国をあげての取り組みが必要だ。環境問題については欧米諸国がイニシアチブを取ってきたが、具体的な生態系保存においては亜熱帯のブリスベンの取り組みは参考になり得る。

また、訪問を通じてブリスベン市関係者の日本、また神戸市に対し親近感や友好の感情を持って、気さくに市の課題や状況を共有してくれたことが望外の喜びであった。市役所の神戸カラーのライトアップやレセプションでの野生動物の展示といった格別のもてなしも積み重ねてきた交流の賜物だろう。人口も急増しており経済的な勢いもあるブリスベンと今後多くの交流を積み重ねたいと感じた。

2、植中雅子

(1) ブリスベン市の印象

- ① 1年を通して過ごしやすい気候に恵まれていること。

7月・8月は真冬に該当するとの事であるが、夕方になると上着が要る程度で、日本の夏や冬に比べると格段に快適。

- ② 街全体が明るく清潔で治安が良い。

持続可能な都市づくりを進めているブリスベン市の、自然との調和のとれた街づくりは神戸市でも参考にしたい。

- ③ キャッシュレス化が進んでいること。

市場でも何の不便もなくカード決済ができ、最終日までドルに両替をしなくて済んだ。日本でも進めていくべきと思う。

- ④ 観光・文化施設が充実しており、市民の生活向上・都市の魅力向上に繋がっている。

- ⑤ インフラの整備

公共交通網（バス・鉄道・フェリー）を一律 50 セントという低料金で利用することが出来、市民の移動効率が高い（市長公約とのこと）。

夕食後ホテルへ帰る際に利用したフェリーでも、乗り降り時にカードを機械に挿入するだけで済み、簡単決済。

- ⑥ エネルギー政策

住みやすいきれいでグリーンの多い街を目指しているブリスベン市は、CO₂削減の為

に、新しいバスはすべて電気自動車であり、市所有地や建物・バス駐車場や橋の上の屋根にソーラーを設置し、街全体の気温を下げる取り組みに徹している。

けれども、森林伐採によるソーラー設置はない。

多くの地域住民の反対があったにも関わらず、神戸市での2ヶ所もの森林伐採によるメガソーラーの設置に至ったことが未だに残念であり、悔やまれる。

⑦ 多文化共生

亡命者や難民あるいは国内居住外国人で、母語が65にわたる12歳～18歳の生徒を年間12000人～14000人を受け入れ、厳しい指導により通常の2倍の速さで英語を習得させ、職を得るための無償支援をブリスベン市が行い、移民の子ども達がオーストラリアのカリキュラムに移行し易くする架け橋教育に感銘を受けた。

「人口が増えて住宅が足りない」という、神戸市民からは羨ましいと思える課題は、手厚い移民対応に起因していると考える。

⑧ 生物多様性にかかるブリスベン市×神戸市セミナー

久元喜蔵市長を始めとする両市の代表のプレゼンと神戸市環境局職員参加のパネルでディスカッションには多くのブリスベン市民が出席され、両市の取り組みが周知され、学びを共有することができた。次回に繋がることを期待したい。

(2) 総括

ブリスベン市との姉妹都市提携から40周年を迎え、長きにわたる友好の積み重ねを実感すると共に、次の交流に向けた新たな出発点であると感じている。

多様性を重んじるブリスベン市には、日本からもワーキングホリデーや、留学・ビジネス等々で多くの日本人が居住し、多くの観光客も訪れている。

今後の交流可能性として、教育・青少年交流をさらに拡充できる余地があり、また、年齢を問わず語学習得に格好の条件を満たしているとも思える。

ビジネス分野での連携、市民文化交流の継続等々、次世代に友好関係を繋いでいくことが重要だ。相互理解と協力を深め、多方面での交流推進に努めたい。

3、吉田健吾

今回、現地での活動日数が3日間でしたが、ブリスベン市との姉妹都市締結40周年の記念訪問は、非常に充実した内容となり、久元市長、菅野議長が出席する公式行事以外にも、議員団としてエネルギー政策や多文化共生についても現地視察をすることができた。

1日目、総領事意見交換では、経済状況、貿易での繋がりなどの説明があったが、オーストラリア自体の日本語学習率が世界の中でも高く、特にクイーンズランド州がオーストラリアで1番盛んであると聞き、親密度合いが高いことが知れる。市長の表敬訪問では、シュリナー市長から2032年のオリンピックに向けた更なる交流をとの話があり、将来的にブリスベンと神戸が空港を介して直接つながることに期待がもてた。また、多文化共生について、州立ミルベラ高校校長から説明を受けた。多文化共生について同国では、在豪外国人の方々

のそれぞれの生活文化を尊重しながらも、オーストラリアの生活様式の中に溶け込んでもらうことを重視していた。本市においても外国人の方々の生活トラブルが散見されており、日本の生活様式を身につけてもらう努力がより一層必要であると感じた。

2日目、カラワサ地区については、子どもたちが遊ぶ広場に感心した。自然の地形、傾斜を活かすとともに、太い丸太を横たわらせた自然の遊具があった。丸太も保護的なペンキは塗ってあったものの、そのまま置いて、少し傾斜をつけていたので、子どもたちが、たくましく昇り降りしていた。地面にはウッドチップが使われていて、独特の踏み心地で、膝や腰に負担が少なそうであった。エネルギー政策カーボンニュートラルについては、メガソーラーについては、広大な大地を有する利点を最大限活かしていた。日本は狭い国土、平地が少ない特性から、メガソーラー以外の公共施設の屋上利用など、意識的にソーラーパネルを設置していることが参考になった。また、夕刻のレセプションにコアラが来ていたことは、現地の方々も驚くぐらいの特別な演出であり、ブリスベン市の気持ちが伝わった。

3日目、カンガルーポイントブリッジでは、自前で電動キックボードの連絡をして、橋を渡ってみたが、非常に快適に住宅街と市街地を結んでいることを実感できた。盆栽ハウスは、日豪友好議員連盟から令和4年に進呈した鉢を使っただいており感慨深かった。生物多様性セミナーでは、本市職員が英語のままのディスカッションしており、堪能な英語のおかげで、神戸の里山について、現地の方々に理解をしてもらえたと感じた。

今回の訪問を通じて、ブリスベン市と本市の繋がりや強さ、また、日本人が過ごしやすい環境であることを実感できた。子どもたちの交流事業も続けられているが、どの世代でも世界に羽ばたく第一歩目として優しいまちであると思うので、今後は、より一層結びつきを強くして、多世代交流などができれば、国際貢献都市として本市がより一層へ進むと考える。

4、上畠寛弘

この度、神戸市長・神戸市会議長とともに日豪友好神戸市会議員連盟の一員としてブリスベン市を訪問した。日程の中におけるレポートにおいても触れたが、ブリスベン市長表敬においては、今後の分野別の交流について議論されたところである。現在、姉妹都市協定を土台にした交流が行われているところであるが、分野別とりわけ経済活動による相互交流が一層の神戸市とブリスベン市の深化、日豪友好の強化につながり、久元市長がレセプション挨拶時において提案し、歓迎された神戸空港におけるブリスベンへの直行便就航の需要喚起にもつながり、ひいては双方の経済発展につながるだろう。現状、台湾や韓国の近隣国を想定とした国際チャーター便の就航ではあるが、オーストラリアまでのフライトを可能とする為の神戸空港の機能における現状の課題について取組み、解決することが必要である。この度の市長側の随行においては空港を所管する港湾局はいなかった為、議会側においてもこのブリスベン直行便を社交辞令やあいさつの盛り上げの為のものではなく、実現に向けて、議会側からも質疑や予算要望等によって働きかけることで実現に向けての土壌を醸成して参りたい。レセプション時には多分野の方々の人的交流を経て、帰国後にも早

速、ブリスベン市で教育機関を経営される方々も来神されたところであり、教育分野での交流にも取り組んで参りたいと考えるが、課題についても把握することが出来た。それは現在、神戸市東灘区内の私学学校である甲南学園、甲南女子学園、甲南学園小学校・幼稚園の甲南三学園による長年のブリスベン市内の私立学校との姉妹学校交流について、神戸市も把握しておらず、また現地の日本の在外機関たる駐ブリスベン総領事もこのことについて把握していなかったということである。一方でブリスベン市主催の歓迎のレセプションにおいては甲南女子学園の甲南女子高校の生徒達も出席し、受け入れるブリスベン市側が配慮を下さっているというものであった。（参考：<https://www.konan-gs.ed.jp/news/2025/08/18/12721.html>）国や自治体の交流のみならず、実際にはこうした民間・学校レベルの草の根交流こそ、日豪関係の基盤を形づくっている。とりわけ青少年交流の中で培われる友情と理解は、長期的な国際理解・平和構築の観点から極めて重要であり、神戸市や総領事館が十分に把握・支援していないのは非常にもったいないと感じた。教育や経済においても民間の交流があつての関係の深化であり、本件については久元喜造市長にお伝えしたところ、「それはぜひ神戸市としてもサポートしたい」との意向を示され、さらにブリスベン市側の私学生徒・児童の訪問時には市長表敬も受け入れてくださる意向も示された。エネルギー政策に関するレクチャーでは、ブリスベン市も一定程度ソーラーパネルの供給を中国製に依存している現状があるとの説明を受けた。特に印象的であったのは、ブリスベン市ではメガソーラー設置に際して森林伐採を伴うような事例は存在せず、自然環境の保全を前提とした土地利用計画が遂行されていることである。これに対し、神戸市のみならず日本では山林を切り開いてまでメガソーラーを設置し、結果として土砂災害や生態系破壊を招く例が多発している。これは国際的に見ても極めて特異であり、再生可能エネルギーの名のもとに自然破壊を容認している日本の現状は、明らかに政策の方向性を誤っていると痛感した。環境保全とエネルギー転換を両立させるブリスベン市の姿勢は、持続可能な都市のあり方を考えるうえで極めて示唆的であった。治安面においても、ブリスベン市は全体として良好であり、訪問中も安全で秩序ある都市環境が保たれていた。特に印象的であったのは、ホームレス対策が計画的かつ厳格に運用されている点である。公共空間における野宿や占拠に対しては原則 24 時間以内に退去措置を行う仕組みが整備されており、福祉的支援と安全確保を両立させているとのことである。こうした対応は 2032 年ブリスベン・オリンピック・パラリンピックを見据えた都市環境整備の一環とも考えられ、国際的な来訪者を迎える都市としての治安維持と景観管理への強い意識がうかがえた。

さらに、神戸市会とブリスベン市議会の間においても、議会外交の観点から交流を強化していくことが望ましい。実際に副議長とも自由と民主主義という基本的価値観を共有する自治体の議会同士が、地域課題の解決や政策形成の経験を相互に学び合うことは、単なる儀礼的交流を超えた実質的な意義を有するといった共通認識を得られた。既に神戸市会と米国のシアトル市議会が築いてきた交流の経験を参考に、ブリスベン市議会との連携協力関係を深めていくべきである。例えば、神戸市会が音頭をとって、日本国内においてもオース

トラリア連邦国内において姉妹都市交流を行っている自治体議会に呼びかけて、全国日台友好議員協議会のような形で全国日豪友好議員協議会を設立し、これにより、行政レベルの都市外交に加え、立法府間の信頼と理解を基盤とする「議会外交」の実践を神戸から発信することが可能となると確信する。

以上、本視察は神戸が「アジア太平洋の自由と民主主義の都市」として自らの立ち位置を再確認し、開かれた国際都市としての方向性を改めて描き直す契機となった。

今後は、ブリスベン市との信頼関係を基盤に、共に学び合う「実践的パートナーシップ」として、ブリスベンとの直行便の実現をはじめとして、神戸の都市外交・議会外交の深化により神戸市・ブリスベン市の経済活性化に資して参りたい。以上

5、村上立真

このたびの「神戸市－ブリスベン市姉妹都市締結 40 周年記念訪問」は、実質 3 日間という多忙なスケジュールにもかかわらず、非常に充実した内容で、神戸市の誇るべき「国際都市としての存在感」を改めて実感する貴重な機会となった。

まず、ブリスベン市は神戸市と同規模・同様の課題（物価高騰、住宅不足、医療への圧迫、青少年犯罪の増加など）を抱えつつも、アジア太平洋において「理想社会の一翼を担う都市」の姿を感じさせる。特に石炭輸出に代表される日本との経済的結びつきや、高度人材を積極的に受け入れたいという意識の高さには、自治体間交流の可能性を強く感じた。

訪問 1 日目、まず在ブリスベン日本国総領事館でのブリーフィングでは現地の課題と展望を詳細に聞くことができ、市長表敬訪問では「2032 年ブリスベンオリンピックに向けた、神戸への直行便の実現を期待する」という温かいメッセージもいただいた。また、州立高校での多文化共生への取り組みは、人的資源への深い投資と意識の高さからこそ可能になっていると感じ、我が国が目指す多文化共生の姿勢にとって大いに示唆を与えるものであった。

2 日目には、生物多様性の保全を目的としたカラワサ自然公園での「小規模山火事による予防的管理」や、学習と研究を両立させる取り組みを見学し、すぐに応用可能な要素が多くあった。加えて、毎週水曜に開催されるブリスベンスクエアマーケットでは、多国籍の食やオーガニック商品が並び、健康志向の市民ニーズを反映したマーケット運営に強く興味を引かれた。エネルギー分野では、市営バスの完全電化と太陽光発電主導のクリーンエネルギー活用、廃パネルの 90%リサイクル可能という先進性にも感銘を受けた。レセプションでは、現地の日本人会の皆様とも交流し、今後の連携や神戸の企業進出にも可能性を感じた。

3 日目には、歩行者と軽モビリティに特化したカンガルーポイントブリッジを視察。都市のウォークアビリティと人口増加への対応を見据えたインフラ整備として、大変参考になった。また、Bonsai House では、日本庭園に地元作家による盆栽、そして七面鳥が庭内を歩くユニークな風景に、文化の融合と日本文化への敬意を実感した。豪日協会主催のネットワークランチでは、神戸企業の進出を支える厚い人脈の重要性を強く再認識した。最後に実施

された神戸市とブリスベン市の共催による「生物多様性セミナー」では、オーストラリアにおける都市内の自然保全意識の高さが際立ち、神戸の取り組みも高く評価されるなど、共通する課題への連携の可能性を感じた。

さらに、この40周年記念を通じて、ブリスベン市が神戸市との関係を最も長く維持する姉妹都市であること、また現地の豪日協会が周年を通じて文化発信を継続していることも、両都市交流の厚みを物語っている。この記念訪問を通じて得られた学びを、今後の神戸市の国際戦略、都市政策、文化交流の深化にぜひ生かしていきたい。

6、高橋としえ

ブリスベン市との提携・交流40周年という輝かしい節目を迎えられたのもひとえにこれまで交流に携わってこられた関係者の方々の熱意とご尽力の賜物であることに深く敬意を表したい。

どちらの視察先も、まずは先住民族の土地への敬意を表す儀式的挨拶と危機管理体制の説明から始まった。ブリスベン市長舎には、先住民のアーティストによるアートを常設展示し、多文化共生セッション、ミルペラ州立高校校長先生からのプレゼンでも、先住民のアートを紹介・先住民の文化・歴史・貢献をたたえ素晴らしいと感じる。

国際都市神戸がブリスベン市から多文化共生の視点で学ぶべきところが多々あった。私自身、今年は未来都市創造に関する特別委員会に所属しており、今年のテーマは、新国際都市 神戸～多様な人材が活躍できる都市を目指して、① 訪日外国人への対応、観光施策、国際交流の促進、② 在住外国人を中心とした多文化共生である。

ブリスベン市は、多文化リエゾン職員を各地域に配置し現場での相談、調整し即時対応している。英語以外の多言語スタッフを常設しているとのこと。

ブリスベン是世界都市の中でも移民人口が多い方に属しており(世界26位)、日本の都市と比べるとかなり高い国際性があるといった背景がある。神戸市も在留外国人で約3.8%、韓国・ベトナム・中国・ネパールなど中心に129カ国出身の方が在住している。神戸市も多言語相談 翻訳サポートのさらなる充実が課題であると再認識をした。神戸市在住の外国人からのヒヤリングを重ね、神戸市の既存多文化共生施策に対して、必要であれば施策の見直し等も進めていきたいと考える。

このレポートを作成しているまさに今、カムチャツカ半島で地震が発生し、日本では一時200万人に避難指示が発令され、神戸でも津波警報が出た。視察先のどちらも冒頭に危機管理の説明があったと先ほども申し上げたが、広域防災体制の重要性をより深く感じ、神戸市でもブリスベンを参考にしたら良いと感じた。生物多様性関連施設では 開発と自然保護の両立を学ばせていただいた。神戸市の戦力的都市計画に取り入れたいと思う。

カンガルーポイント、グリーンプリッジ(全長約460メートル)を歩いて渡った。ソーラーパネル照明、橋長にわたるシェードカバーと植栽設置により、暑い熱環境にも配慮した設計で、橋の袂にはカフェやレストランがあり、景観を背景に市民の憩いの場であり観光施策と

しても成功事例だと感じた。神戸市も港湾の再整備に際し 非常に参考になる。

また、盆栽という日本の美学を伝える盆栽ハウスではブリスベンと神戸市の姉妹都市交流の文化的成果を確認した。豪日協会主催のネットワーキングランチでは、あらためて、協会関連の皆様と信頼関係作りが構築でき、実りあるネットワーキングランチになった。

7、住本かずのり

今回、神戸市姉妹都市 40 周年という事でオーストラリア・ブリスベンに訪問したのだが、最も感じた事はキャッシュレス化が本市よりはるかに進んでいた事である。公共交通、コンビニ、レストラン、街中マーケットなどの支払いは全て手持ちのクレジットカードで全て対応できた。このことは、旅行者にとってこれほど便利でストレスフリーだということは、旅行者になってみなければ分からない事であった。本市においても神戸空港国際化に伴って、今後は益々多くの外国からのインバウンド客が来ると思うのだが、キャッシュレス化の迅速なる対応が必要である。

オーストラリアは移民国家ということで、多文化共生がはるかに進んでいる。法整備されていると思うのだが、どこに行っても土地や先住民に対しての敬意と感謝を述べる事が習慣化されていることが驚きであった。また、現地の日本人会や神戸会（神戸出身日本人会）など、本市と地縁がある邦人も多く在住しており、ブリスベン市主催の意見交換会や日豪協会主催ネットワークランチ意見交換会などで交流ができた事で現地の経済やビジネス環境を知ることができた。ブリスベン市はクイーンズランド州の中心地ということもあり後に述べることで、周辺都市から人口を集め続けており、人口増の課題を抱えているため住宅事情が深刻で不動産価格が上昇を続けている。ビジネス的には現役世代が対象になるため消費活動が盛んな様子である。しかし、店舗賃料が高騰化しており競争も激しい。これまでは学生ビザでの学生受け入れが盛んであったが、今後は審査を厳格化して少しでも人口流入を止めたいとの事。これは、2032 年にオリンピック・パラリンピックを控えているためであり、都市のインフラ等の再整備が急ピッチで行われており、オリンピックに向けて労働者を獲得する必要がある、他州との人材の奪い合いが始まっている。自国民だけでは難しいため外国から労働力の確保を急いでいる。人口増の都市では、本市と全く違い施策が取られており、都市の成長が経済の好循環を生み出し、周辺から人口を呼び込むことに繋がる良い例と感じた。その中で、不動産価格が割安な神戸に進出したいという外食事業者と懇談した。日本人のその方は、物価安、円安の影響でビジネスの面では神戸で十分にビジネスとして成り立つとの事であった。神戸空港国際化により、このような方からの投資を呼び込む絶好のチャンスが生まれている。滑走路延長も含めて今後議論が必要ではないか。また、サステナブルへの関心も高く、ライドシェア（ウーバー）の導入、キックボードの普及などは、市街地への自動車侵入削減のための取り組みとしてはサスティナブルシティへの第一歩であり、法整備が遅れているライドシェアなどは我が国では早急に取り組むべき施策である。

8、山本のりかず

2025 年は神戸市とブリスベン市との姉妹都市提携 40 周年に当たる。先人たちが築いてきた交流に感謝するとともに、過去の歴史についても触れてみたい。神戸市がブリスベン市に姉妹都市提携を最初に打診したのは、1982 年で、当時の市長は宮崎辰雄市長であり、「一大陸に一姉妹都市」という方針を示し、欧米だけでなくオセアニアにも交流相手を求めたのが、ブリスベン市との関係につながったのである。その後、1985 年に実際に姉妹都市協定の調印を行ったのは、後任の 笹山幸俊市長 である。

そのような時間の流れにおいて、幾多の交流や子どもたち、青少年、経済交流などを経て、現在の神戸市とブリスベン市の土台が築けていることに感謝を申し上げたい。

加えて、ブリスベン市における視察先企業や官庁などでは、かならずとっていいいほど、冒頭で先住民への敬意と感謝の意を伝えていた。オーストラリア国民の気質や多様性を重んじる歴史を垣間見た。

神戸市において、2025 年度は阪神・淡路大震災から 30 年の節目を向けているが、神戸の歴史を紡いできた先人たちに感謝するとともに、多様な社会の実現に向けて努力しなければならないことを、今回の視察で再認識した。

スポーツ的な観点では、オーストラリア第三の都市であるブリスベン市では、2032 年にオリンピック・パラリンピックが開催予定で、市内におけるインフラ整備、マンション建築など工事が進捗している風景を確認でき、将来に向けた経済的な投資が進んでいる。

視察先のカラワサ森林は、ブリスベン市南部に位置しており、約 900 ヘクタールの広大な原生林を抱えている。主にユーカリ林や低木の林地帯、湿地帯も包摂している一方で、希少な鳥類（オオフクロウ、ツヤハシオウム）、多様な有袋類（ワラビー、カンガルー）、両生類やその他湿地生態群が存在している。私たちが現場視察をした際に、ワラビーやカンガルーを直接見ることはできなかったが、鳥類は観察することができた。カラワサ森林では、周辺地域と連携することで都市部における生態系保全と回復が進行しており、教育・研究・住民参加といった多角的な取り組みが展開されている。

カラワサ森林のスタッフ説明では、特徴的な管理手法(火入れ)を学んだ。日本では想像することができない管理手法を用いていた。具体的には、森林内で計画された時期や面積などを考慮して、火を使用して管理実施している。森林内の下草や落ち葉を火入れで除くことで、将来的な大規模山火事の発生リスクを抑えること。また、特定の条件下で火入れを使用することで、植物の多様性維持や外来種抑制にも貢献している。



ブリスベン市におけるエネルギー政策について、当局から説明を受けた。二酸化炭素の排出削減において、施設の屋根に太陽光パネル(屋根型太陽光パネル)を設置する。具体的な例として最近ではカンガルーポイント橋の上に太陽光パネル設置している。そして、ブリスベンメトロでは、都市中心部を走る BRT が運行しており、完全電動の超大型バスを導入し、2025 年から 2 路線が本格運行している。

神戸市でも BRT が運行しており、ポートループ(ハイブリット連結バス)が採用されており、ディーゼルエンジンと電動モーターを併用するハイブリット方式である。これからは、完全電動を含めた BRT 導入に向けた検討をしていくことも必要である。

最後に、今回の視察に際して関係者の皆さんに感謝を申し上げる。

9、のまち圭一

今回のブリスベン視察は、神戸市とブリスベン市の姉妹都市提携 40 周年を記念する公式行事への参加を中心に、文化・経済・スポーツ・環境など幅広い分野にわたる交流の現状と将来展望を確認する貴重な機会となった。現地関係者との対話を通じ、これまでの友好の積み重ねの重みを改めて認識するとともに、2032 年のブリスベン五輪・パラリンピックや神戸空港の国際化といった将来の節目に向け、両市が新たな協力関係を築いていく必要性を実感した。1985 年に締結された姉妹都市関係は、文化・教育・スポーツ・経済など

多様な分野で交流を重ねてきた。阪神淡路大震災やブリスベン洪水における相互支援は、両市の信頼関係を象徴する出来事であり、災害に強い都市づくりや市民レベルの交流が深く根付いていることを確認できた。今後は、40年の蓄積を基盤として、さらに次世代へとつながる取り組みを推進していくことが求められる。

ブリスベン市を含むクイーンズランド州は人口増加と経済発展が続いており、2032年の五輪開催を契機にさらなる成長が見込まれる。一方、神戸市も神戸空港の国際化を控え、経済界・学术界・行政が連携した国際的なネットワークの構築が重要となっている。視察を通じ、両市の産業界・大学・研究機関の連携強化が、互いの発展に資する可能性を大いに感じた。

視察の中で訪れた日本庭園や盆栽ハウスは、両市の市民交流の象徴であり、自然との共生や文化的価値を共有する場として高く評価された。また、ラグビーをはじめとしたスポーツ交流が人と人をつなぎ、国境を越えた信頼関係を育む原動力となっていることも実感した。

最後に、本視察を通じ、両市の関係は単なる都市間交流にとどまらず、国際社会における日豪関係の一翼を担っていることを実感できた。今後は、環境・経済・文化・スポーツといった多様な分野での協力を深化させ、次の50年に向けた新たな歴史を築く必要がある。今回得られた知見とネットワークを神戸市の政策や議会活動に生かし、市民に還元していくことが重要である。

(了)